保育者養成校における保育内容「人間関係」と「表現」の授業連携の意義について

丸　橋　聡　美（1「人間関係」担当）
豊　泉　尚　美（2「造形表現」担当）

On the significance of teaching collaboration between childcare content "human relationship" and "expression" in childcare center training school

Satomi Maruhashi
Naomi Toyoizumi

【研究目的・研究方法】

現行の「幼稚園教育要領」の中での５領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）において、筆者１は、保育内容「人間関係」と、実習に向けての事前事後指導を担当している。また筆者２は、保育内容「表現」の造形表現を主に担当している。

学生は、これらの領域をそれぞれの教科目として履修しており、幼稚園・保育所実習では、それぞれの教科の学びを統合的に捉え、保育の場でどのように具現化したらよいか学んで行くこととなる。しかし学びの途中である学生にとっては、別々に履修しているそれぞれの領域の授業を学生自身に自ら統合するようにと求めても、それが保育実践へと結びついていることを理解するのは難しい。実際に筆者１が担当する実習研究（実習事前事後指導の授業を以後「実習研究」と明記する）の授業を行ううちに、学生の多くが保育内容の各教科を実習における指導計画案の中に活かしきれていないことが浮かび上がった。そこで「実習研究」の中で学生が指導計画案作成の方法を学ぶ前に、保育内容の教科を受け持つ担当者同士が連携を図り、保育内容のつながりを学生が意識するために、どのような授業展開をおこなうべきか考えることとした。

先行研究によると『保育者を目指す学生が保育の現場での実践力を習得するには、保育者養成課程における授業科目の枠を超えた実践活動への取組みが重要である』[1)]（智原・下口 2012）とあり、『実習と実習指導を柱とした養成カリキュラムの構造を理解し、学生の育ちのプロセスも共有することができる。そしてその中で自分の担当科目や指導がどのような位置にあり、どのような役割を果たしているのかも理解し、養成カリキュラムを俯瞰して「今、ここでの」自分の指導を考える』[2)]（全国保育士養成協議会 ,2016）としている。「保育内容」科目の授業連携については、「表現」系（造形・図画工作・音楽・幼児体育）の教科目の連携についての研究があり、教科目間の連携を通して学生の学びの必要性がある（白川・東 2008）と述べている。

これらのことを参考に今回の研究では、保育内容「人間関係」と「表現」（造形）の授業で保育の中での子ども同士や子どもと保育者の関係のあり方、その重要性について学生の理解を促し、その理解が実習での実践に結びつくよう、「実習研究」での指導に反映させていくことを試みた。こうした授業連携を行うことにより、学生が保育内容のつながりについて意識が深まったかどうか、アンケート調査により分析し、考察をおこなう。

【実践のプロセス】

１．保育内容「人間関係」と「表現」について

領域「人間関係」は、他の人々と親しみ支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養うという観点から示されている領域であるが、ねらいは以下のように３点ある。〔平成 29 年告知　「幼稚園教育要領」〕

① 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
② 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
③ 社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。

子どもが園生活を楽しむようになるためには園のなかで自分の居場所をみつけ、安心感を得ることが大事である。また、子どもが自分のまわりの身近な人たちから受け入れられているという実感をもち、自分の意思や力で行動することにより喜びや充実感を味わい、人と関わりながら意欲を育てていくことが大切である。そして、仲間との関わりを深め、共通の目的を達成するために友達と一緒に考え、工夫したり協力したりしながら実現しようとするなかで、他の人に対して支え合う存在として愛情や信頼感をもつようになっていく。

子どもは園生活のなかで友だちとぶつかり合いながら子ども同士親しくなる。その過程において決まり事や約束を守ることの大切さに気づき、社会生活における望ましい生活習慣や態度を身につけていくことが重要になる。

これらのねらいを踏まえ、子どもが成長していく過程において子ども一人ひとりを大切にし、子どもが成長するための支援（やさしい言葉かけや温かい気配りなど）をすることを意識し関わることが大切である。それは、管理や押し付けではない、子ども自身の自主性を尊重するものでなくてはならない。そして、子どもが自己を表現し、共通の目的に対し自ら実現しようとお互いに試行錯誤し工夫しながら表現し、友だちとともに表現する喜びを味わい、意欲を育てるなどが重要となってくる。また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすることも大切である。このことから「人間関係」と「表現」の領域はここでつながるものであると考えられる。

一方領域「表現」は、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする領域であり、そのねらいは、以下の3点である。

① いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

これらのねらいに基づく「内容」の中で「(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう」とあるように、「表現」する自己にとって、他者との関係が不可欠である。「(2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」あるいは「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」についても、身近な人たちと共感し合い、その楽しさを共有すること

が重要であろう。このように「人間関係」と「表現」の領域は切り離せない、ということを学生に理解してほしい、と考えた。

各領域は子どもの発達の側面から示されている。そのねらいは、子どもが遊びを通して様々な体験を積み重ねるなかで相互に関連をもち達成され、具体的な内容をもって総合的に指導されるものである。そのため、授業のなかでも各領域の相互の関連性について学生の理解を促す取組みが必要と考える。

２．保育内容「人間関係」と「造形表現」の授業連携の実際

保育内容「人間関係」と「造形表現Ⅰ」履修修了者を対象に部分実習として、自己紹介活動をおこなうこととした。

1）　保育内容（造形表現Ⅰ）で「自己紹介グッズ」とパネルシアター作成〔注 1〕
2）　指導計画案を立案する。〔注 2〕
3）　模擬保育の実施（部分実習「自己紹介」）〔注 3〕
4）　ディスカッションを行い、良かった点、改善点などを話し合う。〔注 4〕
5）　改善点を元に部分実習「自己紹介」を修正する。
6）　保育内容の授業のなかで PDCA サイクルを実施する。
　　Plan：指導計画の立案（今ある子どもの発達や状態を捉えて指導計画を立案する）
　　Do：保育を実践する
　　Check：反省評価する（実際の保育を振り返り、反省・評価）
　　Action：保育を修正する（反省をもとに自らの保育を見直す）

尚、模擬保育後に学生に対し、自己の保育を振り返ることができるように、アンケート（資料 1）を実施した。N:69

＊　2）以降については、保育内容「人間関係」の授業の中で実施した。

〔注 1〕保育内容（造形表現Ⅰ）で「自己紹介グッズ」を作成したプロセス

保育内容「表現」の授業では、学生が初めての教育・保育実習に向かう準備として、実習で出会う子どもたちとの交流のためのグッズ制作をおこなってきた。

具体的には各自自己紹介などに使えるグッズとパネルシアターを作る。

その際筆者 2（造形表現担当）は多様な自己紹介の方法があることを説明し、10 数種類の例を提示する。但しそれはあくまでも例であることを伝え、学生自身で自分が作りたいもの、それを使って子どもたちと関わりたいものを自由に選んでくるように促す（例：コーンカップ人形、パペットや指人形など）。

また自己紹介だけに限らず、制作したグッズを他の保育場面（午睡の前、朝の会、絵本の読み聞かせの導入など）でも使えることを参考例で示し、その後制作技法を各自調べて素材を集め、完成する。子どもたちの前でどのように見せるか、子どもたちの反応も想像しながら、制作するよう促した。その結果、様々な自己紹介グッズが完成したが、多かったのは「コーンカップ人形」「パペット」「指人形」などの人形系で、他にからくりおもちゃや絵カード、手作り紙芝居などもあった。

Photo1　自己紹介グッズ例
（パペット・ペープサート・コーンカップ人形）

グループ内で完成した作品を見せ合い、意見交換する。

ここまでは「造形表現」の授業で行い、その後子どもとどのように関わればよいかを考える活動は「人間関係」の授業でおこなった。

尚、同じく学生が部分実習でおこなうことができるように「パネルシアター」を制作した。

パネルシアターは、自己紹介グッズの制作の時以上に、子どもとの関わり方に留意しながら、各自の表現力を生かしながら制作した。その後、発表をおこない、意見交換や振り返りをする。

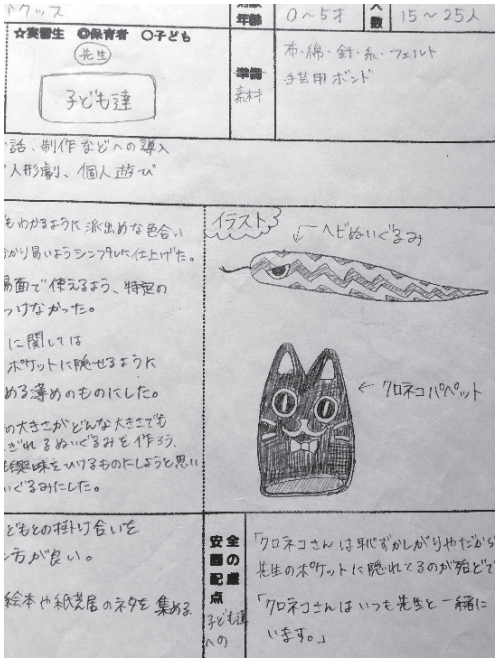
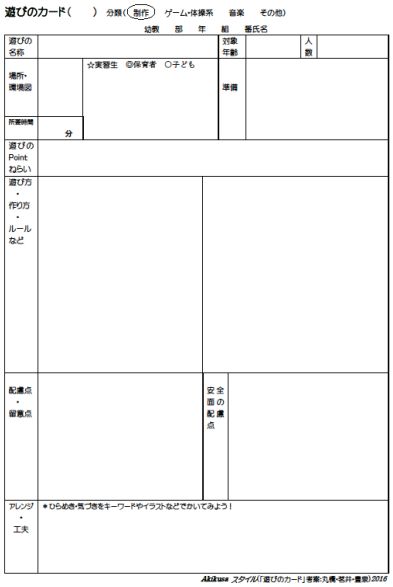


Photo2 「遊びのカード」学生記入例



＊「遊びのカード」
考案：丸橋・茗井・豊泉 2016

「遊びのカード」は、学生が教科目のつながりをより意識できるようにするために、保育内容「人間関係」「造形表現」「幼児体育」の教科目担当者が考案・作成し、共通で導入しているものである。そして、実習事前指導の授業のなかで特に部分実習や責任実習において、指導計画案作成前のラフスケッチを作成する際の記録用紙として使用し、保育活動の内容整理や決定に直接結びついていくということをわかりやすく記録するものである。

（注：「遊びのカード」は、遊びの名称、対象年齢、人数、場所・環境図、準備、遊び方（ルールなど）、配慮点（安全面、留意点）、工夫やアレンジ等の項目で構成される。）

〔注 2〕

保育内容「人間関係」の授業のなかで、指導計画案の立案の仕方についての説明をおこなった。部分実習「自己紹介」の指導計画案を作成する際の留意点を説明した。「自己紹介」という活動は何のためにどのような場面で行うものであるかということを考え、学生が実際の自己紹介をイメージした上で「自己紹介」のねらいとはどのようなことが考えられるか、子どもと共に楽しめる内容を考えるなど、まず領域「人間関係」のねらいや内容を考え、他領域のねらいや内容も踏まえて指導計画案の作成をおこなうことになった。さらに模擬保育を行う際の条件（5歳児対象・5分程度・自己紹介グッズを使用する）を提示し、それをもとに学生は保育内容「造形表現」で作成した「遊びのカード」を参考に子どもとの関わり方や展開の仕方を考え、指導計画案の立案をおこなった。

〔注 3〕

模擬保育の実施（部分実習「自己紹介」）では、学生は５人１組のグループになり、１人は実習生役、残りの４人は子ども役（5 歳児）の役割を担う。

実習生役が子ども役の前で自己紹介を行う。子ども役の学生は、実習生役の学生の評価をおこなった。

① 選んだ内容はわかりやすく、子どもの興味をひくものであったか
② 聞きやすく、見やすい環境構成になっていたか
③ 声の大きさは適切であったか
④ 子どもが楽しめるような工夫があったか
⑤ 子どもの反応を受けとめながら活動を進めようとしていたか

上記の評価内容を提示し、5 段階評価（よくできた･できた･ふつう･あまりできなかった・できなかった）で模擬保育「自己紹介」を実施した。

〔注 4〕

子ども役からの評価〔注 3〕を踏まえ、学生同士グループごとに良い部分、不足している部分、改善点などについてディスカッションをおこなった。友だちとグループで話し合うことで、さらなる改善点を３つあげることとした。そして、その改善点を踏まえ、部分実習「自己紹介」の展開に活かす（指導計画案の修正）こととした。

【結果】

１．保育内容「人間関係」と「表現（造形）」の授業連携の実践

保育内容「人間関係」と「造形表現」の授業連携により、模擬保育「自己紹介」の実践を行い、その後アンケート調査を行った結果は以下の通りである。

1）自己紹介を行う際、ねらいとしてどのような領域があげられると思いますか。

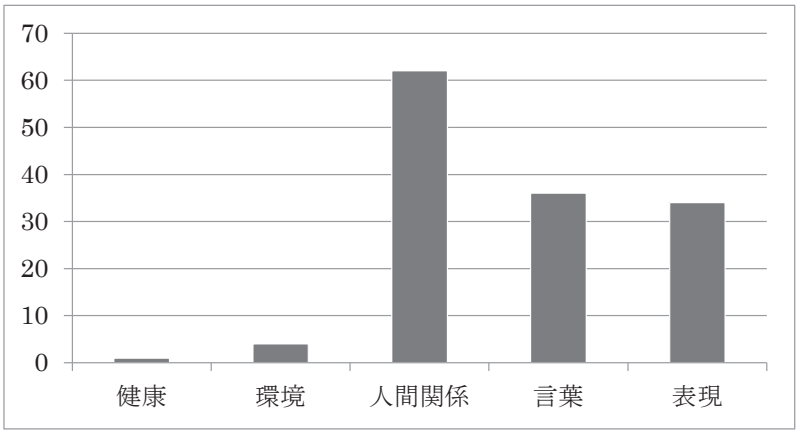


表 1）　部分実習「自己紹介」のねらい

ねらいとしてあげられた領域は「人間関係」が一番多かった。次に「言葉」と「表現」が続いた。

「人間関係」のねらいとしての内容は、自己紹介によって「実習生に親しみや関心をもち、一緒に楽しむ」というものがあげられた。

「言葉」のねらいとしての内容は、「実習生の言葉や話に関心をもち、言葉のやりとりを楽しむ。言葉を通して自分を理解してほしい。」などがあげられた。

「表現」では、一緒に活動を楽しむために自分を表現する、自分に興味関心を持ってもらうためのもの（人形やペープサート）を作り、それを活用する。ものを用いて自分を表現し、興味・関心が持てるようにする、様々な想像を膨らませて楽しむ、子どもの感情表現を引き出す、というものがあげられた。

2)　ねらいや活動内容の展開を考える際、保育内容「人間関係」の内容を活かすことができましたか。

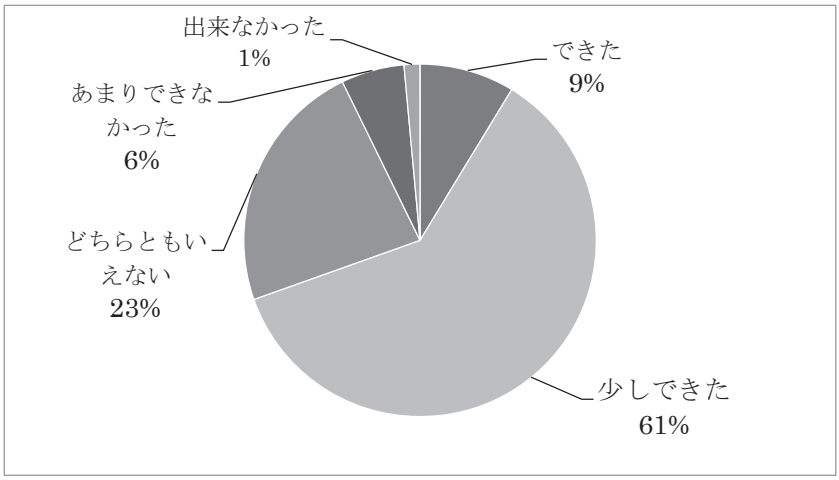


図 1)　保育内容（人間関係）で学んだことを部分実習に活かせたか

学生は、「自己紹介」の指導計画案を立案する際、子どもたちが実習生に親しみをもてるような工夫を考えているということがわかった。具体的には、子どもが関心を示すようなもの（造形や歌、手遊び）の使用や言葉でのコミュニケーションの方法（質問対話やクイズ形式）などを考え、指導計画案のなかに取り入れている。

自己紹介のなかで子どもも一緒に参加できるようにと立案をするが、子どもの興味関心を引くためにものや対話の活用にとどまり、逆に実習生の自分を知って欲しい、自分に対して親しみを持って欲しいための直接的な内容が抜けてしまい自分の名前など伝えていないことを実践後に気づく学生もいた。

他に、活動内容の共有（好きな物、苦手な物など）を子どもと共にすることで、親しみをもつという人間関係のねらいが達成できるように工夫して取り組んでいる姿もあった。

3）　ねらいや活動内容の展開を考える際、保育内容（造形表現）の内容を活かすことができましたか。

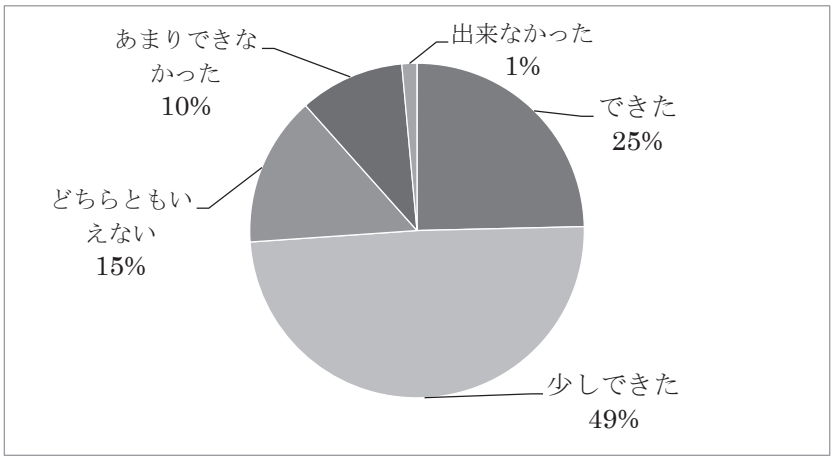


図 2）　保育内容（造形表現）で学んだことを部分実習に活かせたか

自己紹介のなかで使うために子どもの関心を向けやすいもの（例えばパペット、ペープサート、創作絵本など）を考えながら制作したという意見があった。しかし、このものをどのように自己紹介に活用し、展開するのかということを考えると、ものを活用する難しさやものを使用し展開する難しさを感じたようである。このように感じたのは絵本などを制作した学生に多かった。パペットなどについては、使用しやすさはあるが、展開の仕方がまだわからず、提示の仕方の難しさを感じている学生もいた。実際に模擬保育を行ってみると、ものを使用する必要がないような展開の仕方になってしまったという意見もあった。これらのことから、「自己紹介」という活動の展開を考えてからグッズの制作をおこなうことで細かな点まで配慮できたと考える。

また、実習生と子どもとのやりとりだけでなく、ものを媒介にしてさらに子どもとのやり取りを楽しむことが出来たという意見もあった。ものを使うことで意外性を演出しようと工夫する学生もいたが、自分の気持ちをものを媒介として子どもに伝えようとしていることは共通していると考えられる。

4)　子どもの役割を取りながら、実習生の役割を行っている学生の自己紹介を体験し、活動のねらいが達成したと感じられましたか。

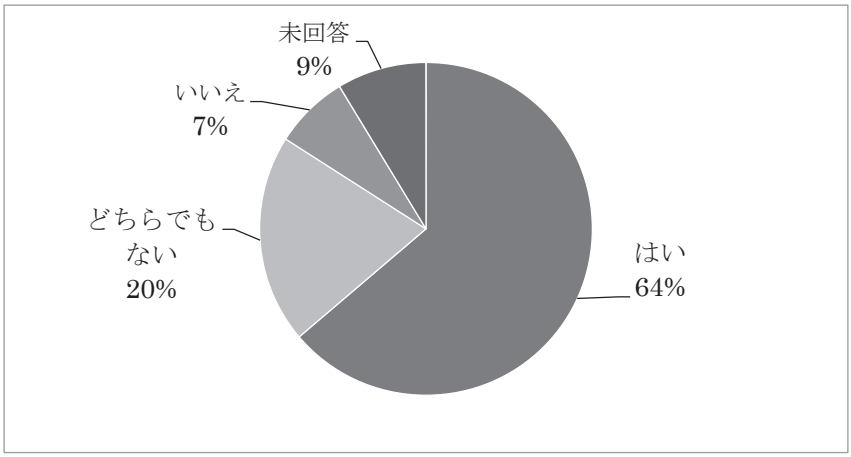


図 3)　実習生役の自己紹介のねらいを達成したと感じたか

子どもの役割から自己紹介のねらいが達成していると答えた人は 64% であった。

見ていて楽しかった、実習生のことに興味をもった、子どもの反応を気にかけながら進めている様子がみられた、グッズに興味が持てるような工夫がされていて感心した、子どもとのやり取りがあり一緒に楽しんで参加していると感じた、実習生の話を聞こうという気持ちになれた、その後の活動の際興味を持って実習生のもとへ行くような気がした、など子ども役の学生は実習生に対して共感しやすかったと感じていたようである。

「いいえ」と答えた人は 7% であった。

子どもとのやりとりがなく、一方的な感じがした、子どもの集中力が続かない内容だと感じたという意見があげられた。

「どちらでもない」と答えた人は 20% であった。

実習生が自己紹介の流れを把握せずに行っていると、活動の流れがとぎれとぎれになりつまらないと感じた。実習生役の人が一人で先走ってしまい、子ども役を行っていてそれについていけないと感じた、もう少し丁寧な関わりが必要である。実習生の名前はわかったが、それ以外は何もわからなかった、自分を紹介したかったのかグッズを紹介したかったのかわからなかった。子どものことを見ずに進めている、などの意見があげられた。

このことから、学生は子ども体験をすることで客観的に実習生の様子を把握し、さらに自分自身が「自己紹介」を行うときの参考にするという学びにつながっていることがわかった。

5)　ねらいを達成するためにどのような配慮をおこないましたか

学生は、子ども側の視点に立ち、子ども自身が活動に参加しやすい、見やすいような工夫や配慮をおこなっていたようである。それは、学生自身が取り組んだこととしてパペッ

トの持ち方や子どもが聞こえるような声の大きさ、ゆっくりと話すなどを意識し実践している。また子どもと目を合わせ、反応をみて子どもに寄り添えるようにし自分に親しみを感じてもらえるようにするなど意識しながら子どもと関わろうとしていることがわかる。

さらに子どもが何に興味を持っているのかを考え、一方的におこなうのではなく、子どもも参加しコミュニケーションを取りながらおこなうにはどのようにしたらよいかを考えている。また子どもに興味関心を持ってもらうために、子どもがわかりやすく楽しめる内容にし、子どもと共有できること（好きな食べ物など）を考えている。

そして、学生自身が子どもの前で恥ずかしがらないようにし、表情や言葉遣い、グッズを出すタイミングなど活動の流れを自ら止めないように意識した（指導案を見ながら行うと流れが止まり、子どもの様子反応を見ずに活動を行うことになるため）という意見があげられた。子どもたちに一番覚えていてもらいたい内容は最後におこなうなどの工夫をしていた。

6）　模擬保育を通して保育者として子どもを意識して実践することができましたか

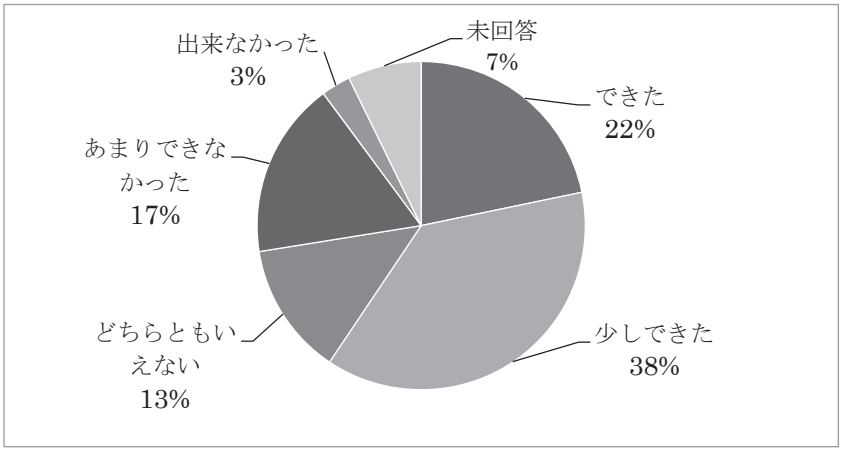


図 4）　保育者として子どもを意識して実践することができたか

60% の学生が子どもを意識して実践することができたと答えている。あくまでも模擬保育での実践のため、目の前にいる人は子どもではなく同級生であるが、実際の実習を想定して子どもならどのように感じるかなと意識しながら取り組んでいたことがわかった。

できなかった 20%、どちらでもない 13%と子どもをあまり意識しておこなうことが出来なかったという意見もあった。

7）　模擬保育を通して、保育者として実践力を高めるためにはあなたは何をした方がよいと考えましたか

学生は、子どもを理解することの重要性に気がついたようである。そのためには、子どもの興味や関心事について知ることや、子どもの年齢ごとの発達についてもっと学ぶ必要

がある。このことを理解し、保育のねらい（5領域）を意識しながら指導計画を立案し、活動の展開の仕方を学ぶことが大切であると学んだようである。

さらに、子どもと関わる際の言葉遣いや姿勢についても考えたようである。それは学生自身の語彙力をあげて、子どもが理解しやすい言葉で説明できるようにすることや正しい姿勢や振る舞いが大切であるとの意見があげられた。また、子どもの反応を確かめながら臨機応変に対応する力を養うために、人前に立つ時に過度に緊張したり恥ずかしがらないことや日常生活のなかで今子どもが目の前にいたらどうするのかなどを常に考えて意識し行動する、活動内容を覚えられるように練習を重ねることが必要などあげられた。

実際に模擬保育を行うことで、学生は大人の視点から保育を捉えるのではなく、子どもの視点に立ち保育を捉え、活動を展開していくことが重要であるということを学んだことがわかった。

8）　今回の実践と通して、保育内容「人間関係」と保育内容「造形表現」との授業のつながりを意識できましたか

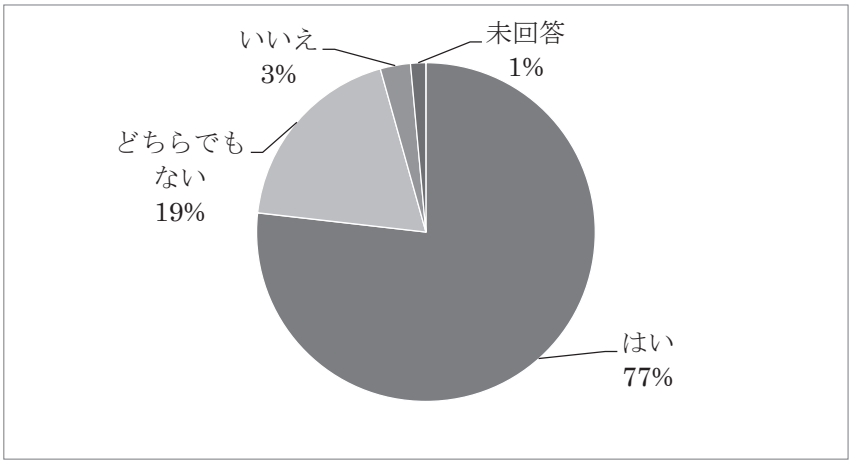


図5）　授業のつながりを意識することができたか

今回の模擬保育の実践を通して、77%の学生が保育内容「人間関係」と「造形表現」との授業でのつながりが保育活動のなかにあると感じたようである。

「どちらでもない」と答えている学生が19%、「いいえ」が3%と21%の学生は、授業のつながりについて実感できなかったようである。

9）　授業を通して、どのような点がつながっていると感じましたか。

「遊びのカード」を使ってねらいを考えている時に、保育には5領域が必ず含まれており、授業のつながりを感じることが出来た。保育内容のそれぞれの授業を受講し、今回の模擬保育を行ったことで授業のつながりを感じた。遊びのなかには目的・ねらいがあり、そのことを考えるなかで人間関係や表現が繋がっているとわかった。子どもを中心に考え、子

どもの年齢や活動方法を考えることはどの授業も同じであると思った。子どもとの関わりを考えるきっかけとしても「表現」が関係している（グッズを媒介とした人間関係）。もので表現、自分を表現、他の人との関係性を表現、ことばで表現など保育内容のつながりを理解することができた。「人間関係」のねらいを達成するために、もので表現することがあるということがわかった。初めての出会いの場面で子どもと保育者の距離を縮めるツールとしての造形表現であったのが、活動を進めるごとに人間関係が変化していく様子がみえた。

今回の連携授業と模擬保育を行ったことで、それぞれ授業内容は異なるが全ての教科がつながっていると実感した。

アンケートから以下のことが確認できた。

・それぞれの授業の意図（子どもと保育者の関係の重要性を伝える）を理解できた。
・授業のつながりを意識（理解）できた。
・実践への意欲が高まった。自信がついた。
・パネルシアター（自己紹介グッズ）を使って、保育者として子どもとのかかわりを意識しながら演じることができた。

【考察・今後の課題】

保育内容「人間関係」では、子ども自身の自立や自発性の育ち、子ども同士の仲間関係の育ち、遊びのなかでルールを身につけるなどのねらいのなかで保育がおこなわれ子どもは育っていくが、その際人間関係のねらいだけで保育活動は展開できない。そこには、他の領域との関連性があり相互に絡み合いながら子どもの成長発達を助ける働きがあると考える。そのことを知るためには、それぞれの領域を担当する教科担当者同士が協力し合い実際模擬保育などの実践的な取組みをおこなうことで学生は領域の授業のつながりを認識できたと考えられる。

保育内容「造形表現」の授業では、従来制作したものを活用して子どもとかかわることができるよう準備してきた。しかし実際授業時間内では、制作の目的や方法等を理解した上で制作に向かうのが精一杯で、制作したものをどのように子どもたちに提示し、子どもたちとどのような関係を結ぶか、というところまで見届けにくい、という課題があった。

今回保育内容「人間関係」の授業と連携することによって、子ども同士、また子どもと保育者の関係性のありかた等について考え、実践することができる良い機会を得られた。

また、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに幼稚園教育要領（平成 29 年告示）に入れられた。（第 1 章第 2）

幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿は、①健康な心と体（健康）、②自立心（人間関係）、③協同性（人間関係）、④道徳性・模範意識の芽生え、（人間関係）⑤社会生活との関わり（人間関係･環境）、⑥思考力の芽生え（環境）、⑦自然との関わり･生命尊重（環境）、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚（環境・言葉）、⑨言葉による伝えあい（言葉）、⑩豊かな感性と表現（表現）、[2] であるが、②～⑤までは「人間関係」の内容が含まれている。この中の②③⑩の項目は、とりわけ領域「人間関係」と「表現」の両方に密接に関わるものである。その共通性、つながりを学生が今回の授業連携で理解が進んだかどうかは今後検討していきたい。

（資料1） アンケート

自己紹介・パネルシアターの実践についての振り返り

《模擬保育：自己紹介について》

1．自己紹介を行う際、ねらいとしてどのような領域があげられると思いますか。

［　領域「健康」･「環境」･「人間関係」･「言葉」･「表現」　］

◦またねらいで立てたその領域の内容は何ですか（記入例：「領域名」内容・・・）

2．自己紹介の指導案を作成して、

①ねらいや活動内容の展開を考える際、保育内容（人間関係）の内容を活かすことができましたか。

［　できた・少しできた・どちらともいえない・あまりできなかった・できなかった　］

◦どのような内容を考え、指導案に反映（組み込む）させましたか。

②ねらいや活動内容の展開を考える際、保育内容（造形表現）の内容を活かすことができましたか。

［　できた・少しできた・どちらともいえない・あまりできなかった・できなかった　］

◦どのような内容を考え、指導案に反映（組み込む）させましたか。

3．模擬保育（自己紹介）体験を通して

①子どもの役割を体験し、先生役の自己紹介を見て、活動のねらいが達成したと感じらましたか。［　はい・どちらでもない・いいえ　］

◦「はい」と答えた人は､ねらいを達成したと感じたところはどのようなことですか。

◦「いいえ」と答えた人は、ねらいを達成していないと感じたところはどのようなことですか。

◦「どちらでもない」と答えた人は、どのように感じましたか。

②先生の役割を体験して、ねらいを達成するために子ども役に対してどのような配慮をしましたか。

③模擬保育を通して、保育者として子どもを意識して実践することができましたか。

［　できた・少しできた・どちらともいえない・あまりできなかった・できなかった　］

④模擬保育を通して、保育者としての実践力を高めるためにあなたは何をしたらよいと

考えましたか。

4．今回の実践を通して、保育内容（人間関係）と保育内容（造形表現）との授業のつながりを意識できましたか。　［　はい・どちらでもない・いいえ　］

◦授業を通して、どのような点がつながっていると感じましたか。

自己紹介・パネルシアターの実践についての振り返り

《パネルシアター》

1．パネルシアターについて

①パネルシアターを通して、保育者として子どもを意識して実践することができましたか。

［　できた・少しできた・どちらともいえない・あまりできなかった・できなかった　］

②パネルシアターを通して、保育者としての実践力を高めるためにあなたは何をしたらよいと考えましたか。

2．今回の実践を通して、保育内容（人間関係）と保育内容（造形表現）との授業のつながりを意識できましたか。　［　はい・どちらでもない・いいえ　］

◦授業を通して、どのような点がつながっていると感じましたか。

【引用・参考文献】

1. 智原江美・下口美穂『大学における科目を連携させた授業の取組み－「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告 3 －』京都光華女子大学短期大学部紀要第 50 集 2012[1)]
2. 全国保育士養成協議会「専門委員会課題研究報告書」2016[2)]
3. 白川佳子・東ゆかり『二年制保育者養成課程における「保育内容」科目の連携に関する一考察－学生アンケートと「表現Ⅱ」「図画工作Ⅱ」の連携授業の実践を中心として－』鎌倉女子大学紀要第 15 号 2008
4. 『幼稚園教育要領』（平成 29 年告知）
5. 無藤隆監修　『幼稚園教育要領ハンドブック（2017 年告示版）』学研教育みらい 2017
6. 無藤隆･汐見稔幸･砂上史子著　『3 法令ガイドブック－新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育･保育要領」の理解のために－』　フレーベル館　2017
7. 茗井香保里編著『幼稚園・保育所・施設実習－子どもの育ちと安全を守る保育者をめざして－』大学図書出版　2017
8. 高杉自子・岸井慶子編著『人とのかかわりに関する領域　人間関係』東京書籍株式会社　2000
9. 咲間まり子編著　『保育実践を学ぶ　保育内容「人間関係」』　みらい　2013
10. 無藤隆・古賀松香編著　『社会情動的スキルを育む「保育内容人間関係」乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは』　北大路書房　2016

11. 森上史郎・吉村真理子・後藤節美編著　『保育内容「人間関係」』ミネルヴァ書房 2001
12. 丸橋聡美『「保育内容」と保育所実習」の授業連携についての一考察　～「遊びのカード」の活用について～』日本保育学会 70 回大会発表要旨集 2017